

米国農務省穀物等需給報告(2022年11月9日発表のポイント)

令和4年11月10日
大臣官房政策課食料安全保障室

米国農務省は、11月9日(現地時間)、2022/23年度の7回目の世界及び主要国の穀物・大豆に関する需給見通しを発表した。その概要は以下のとおり。
－2022/23年度の穀物の生産量は消費量を下回る見込み

1. 世界の穀物全体の需給の概要(見込み)

(※↑↓は前月見通しからの増減)

- ① 生産量: 27億4,590万トン(対前年度比 1.9%減) ↓
- ② 消費量: 27億7,669万トン(対前年度比 1.0%減) ↑
- ③ 期末在庫量: 7億6,327万トン(対前年度比 3.9%減) ↓
期末在庫率: 27.5%(対前年度差 0.8ポイント減) ↓

【主な品目別の動向】

小麦 : 世界の生産量は、アルゼンチンで10月の乾燥により単収が引き下げられたが、豪州で平年以上の降雨に恵まれ単収が引き上げられたことから、前月から上方修正され、史上最高となる見通し。世界の消費量は、EU等の飼料用その他需要量で引き上げられるも、バングラデシュ等の食用他需要の引き下げにより前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。なお、ウクライナの実産量、輸出量は前月から見通しの変更はない。

- ① 生産量: 7億8,268万トン(対前年度比 0.4%増) ↑…ロシア、カナダ、カザフ等で増加、ウクライナ、アルゼンチン、インド、EU、等で減少(前月に比べアルゼンチンで下方修正)
- ② 消費量: 7億9,117万トン(対前年度比 0.3%減) ↑…ロシア等で増加、インド、中国等で減少
- ③ 期末在庫量: 2億6,782万トン(対前年度比 3.1%減) ↑…ロシア、中国等で増加、インド、EU、米国等で減少
期末在庫率: 33.9%(対前年度差 1.0ポイント減) ↓

とうもろこし : 世界の生産量は、米国で単収が引き上げられたが、EUでハンガリーの生産量が引き下げられたため、前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の消費量は、前年度より減少する見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。なお、ウクライナの実産量、輸出量は前月から見通しの変更はない。

- ① 生産量: 11億6,839万トン(対前年度比 4.0%減) ↓…ブラジル、アルゼンチン等で増加、米国、EU、ウクライナ等で減少
- ② 消費量: 11億7,530万トン(対前年度比 2.3%減) ↑…中国、ブラジル等で増加、米国、EU、カナダ等で減少
- ③ 期末在庫量: 3億76万トン(対前年度比 2.2%減) ↓…ウクライナ、ブラジル等で増加、米国、中国、EU等で減少
期末在庫率: 25.6%(対前年度差 0.01ポイント増) ↓

コメ(精米) : 世界の生産量は、パキスタン南部のシンド州で、洪水の影響により単収が引き下げられたこと等から、前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。

- ① 生産量: 5億369万トン(対前年度比 2.2%減) ↓…インド、パキスタン等で減少
- ② 消費量: 5億1,777万トン(対前年度比 0.4%減) ↓…インド等で減少
- ③ 期末在庫量: 1億6,902万トン(対前年度比 7.7%減) ↓…中国、インド等で減少
期末在庫率: 32.6%(対前年度差 2.6ポイント減) ↓

2. 世界の大豆需給の概要(見込み)

世界の生産量は、米国で単収が引き上げられたが、アルゼンチンで収穫面積が引き下げられたことから、前月から下方修正された。しかし、ブラジルの増産などから前年度を上回り、史上最高となる見通し。世界の消費量は、中国等の需要増で前年度を上回る見通し。世界の生産量は消費量を上回り、期末在庫量は前年度を上回る見通し。

- ① 生産量: 3億9,053万トン(対前年度比 9.8%増) ↓…ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、中国等で増加、米国等で減少
- ② 消費量: 3億8,017万トン(対前年度比 4.7%増) ↓…中国等で増加
- ③ 期末在庫量: 1億217万トン(対前年度比 7.9%増) ↑…ブラジル等で増加
期末在庫率: 26.9%(対前年度差 0.8ポイント増) ↑

世界の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年11月9日発表)

【穀物】

(単位：百万ト)

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (予想)	2022/23		(参考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		2,725.14	2,797.89	2,745.90	▲ 1.9%	▲ 0.6	2,295.7
消費量		2,741.31	2,805.31	2,776.69	▲ 1.0%	1.5	2,284.4
期末在庫量		801.47	794.06	763.27	▲ 3.9%	▲ 2.5	480.4
期末在庫率		29.2%	28.3%	27.5%	▲ 0.8	▲ 0.1	21.0%
小麦							
生産量		774.53	779.44	782.68	0.4%	1.0	660.5
消費量		782.08	793.78	791.17	▲ 0.3%	1.0	680.0
期末在庫量		290.65	276.31	267.82	▲ 3.1%	0.3	181.1
期末在庫率		37.2%	34.8%	33.9%	▲ 1.0	▲ 0.0	26.6%
粗粒穀物							
生産量		1,441.28	1,503.36	1,459.54	▲ 2.9%	▲ 0.3	1,159.2
消費量		1,455.74	1,491.61	1,467.75	▲ 1.6%	0.8	1,139.5
期末在庫量		322.90	334.64	326.43	▲ 2.5%	▲ 0.6	175.7
期末在庫率		22.2%	22.4%	22.2%	▲ 0.2	▲ 0.1	15.4%
とうもろこし							
生産量		1,129.29	1,217.46	1,168.39	▲ 4.0%	▲ 0.4	898.8
消費量		1,143.97	1,202.59	1,175.30	▲ 2.3%	0.8	877.4
期末在庫量		292.80	307.68	300.76	▲ 2.2%	▲ 0.4	144.8
期末在庫率		25.6%	25.6%	25.6%	0.01	▲ 0.1	16.5%
コメ(精米)							
生産量		509.32	515.09	503.69	▲ 2.2%	▲ 1.4	476.1
消費量		503.49	519.91	517.77	▲ 0.4%	▲ 0.3	464.9
期末在庫量		187.92	183.10	169.02	▲ 7.7%	▲ 2.2	123.5
期末在庫率		37.3%	35.2%	32.6%	▲ 2.6	▲ 0.4	26.6%

【大豆】

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (予想)	2022/23		(参考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		368.52	355.59	390.53	9.8%	▲ 0.5	269.1
消費量		363.76	363.17	380.17	4.7%	▲ 0.1	265.1
期末在庫量		100.03	94.67	102.17	7.9%	1.7	58.7
期末在庫率		27.5%	26.1%	26.9%	0.8	0.4	22.1%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 9, 2022)

「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / 消費量

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6~5月)、とうもろこし(9~8月)、コメ(8~7月)、大豆(9~8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。

なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考)は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」 については、公表された最新のデータを使用している。

米国の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年11月9日発表)

【穀物】

(単位：百万ト)

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (予想)	2022/23		(参考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		429.86	448.60	414.89	▲ 7.5%	0.6	353.0
消費量		351.24	361.36	348.36	▲ 3.6%	0.9	317.1
輸出量		107.23	94.85	82.57	▲ 12.9%	▲ 0.4	51.6
期末在庫量		58.40	57.18	49.21	▲ 13.9%	0.3	44.2
期末在庫率		12.7%	12.5%	11.4%	▲ 1.1	0.1	12.0%
小麦							
生産量		49.75	44.80	44.90	0.2%	-	61.3
消費量		30.41	30.40	29.75	▲ 2.1%	0.1	37.8
輸出量		27.05	21.78	21.09	▲ 3.2%	-	27.5
期末在庫量		23.00	18.21	15.54	▲ 14.7%	▲ 0.1	19.5
期末在庫率		40.0%	34.9%	30.6%	▲ 4.3	▲ 0.4	29.9%
粗粒穀物							
生産量		372.89	397.71	364.77	▲ 8.3%	0.7	285.3
消費量		315.97	326.15	314.11	▲ 3.7%	0.7	275.5
輸出量		77.21	70.46	59.22	▲ 16.0%	▲ 0.3	20.7
期末在庫量		34.01	37.71	32.52	▲ 13.8%	0.3	23.5
期末在庫率		8.6%	9.5%	8.7%	▲ 0.8	0.1	7.9%
とうもろこし							
生産量		358.45	382.89	353.84	▲ 7.6%	0.9	273.2
消費量		306.69	317.12	305.45	▲ 3.7%	0.6	263.0
輸出量		69.78	62.78	54.61	▲ 13.0%	-	18.5
期末在庫量		31.36	34.98	30.02	▲ 14.2%	0.3	20.9
期末在庫率		8.3%	9.2%	8.3%	▲ 0.9	0.1	7.4%
コメ(精米)							
生産量		7.22	6.09	5.22	▲ 14.3%	▲ 0.0	6.3
消費量		4.86	4.81	4.51	▲ 6.2%	0.0	3.8
輸出量		2.97	2.61	2.25	▲ 13.8%	▲ 0.1	3.4
期末在庫量		1.39	1.26	1.15	▲ 8.7%	0.1	1.2
期末在庫率		17.8%	17.0%	17.0%	0.03	1.7	16.1%

【大豆】

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (予想)	2022/23		(参考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		114.75	121.53	118.27	▲ 2.7%	0.9	82.8
消費量		60.91	62.78	64.48	2.7%	0.3	48.6
輸出量		61.67	58.72	55.66	▲ 5.2%	-	36.1
期末在庫量		6.99	7.45	5.99	▲ 19.6%	0.6	3.8
期末在庫率		5.7%	6.1%	5.0%	▲ 1.1	0.5	4.5%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 9, 2022)
「Oilseeds : World Markets and Trade」、 「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / (消費量 + 輸出量)

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6~5月)、とうもろこし(9~8月)、コメ(8~7月)、大豆(9~8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。
なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考)は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds : World Markets and Trade」、 「PS&D」 については、公表された最新のデータを使用している。

(参考1)

世界の穀物等の価格動向 (2022年)

● 小麦 : 8.48 ドル/bu (前年同時期の価格 : 7.67 ドル/bu)

【価格は、シカゴ商品取引所における2022年11月第1週末のセツルメント価格。史上最高値 : 14.25 ドル/bu(2022年3月7日)】

【1月～3月】

1月は、USDA 1月需給報告での市場予想を上回る世界の期末在庫量も、7ドル/bu 台前半から半ばで推移。その後、米国中西部での寒波の影響懸念や、ウクライナ情勢の緊張から、8ドル/bu 台前半に値を上げた。2月は、ロシアのウクライナ侵攻による供給懸念等から値を上げ、3月7日には史上最高の14.25ドル/buに値を上げたものの、その後10ドル/bu 前後に値を下げた。

【4月～6月】

4月は、USDA 作付意向面積の増加等から、9ドル/bu 台後半に値を下げたものの、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化による小麦供給懸念や、米国プレーンズの乾燥による米国産冬小麦への影響懸念等から11ドル/bu 台前半に上昇。その後、米国の低調な輸出等から10ドル/bu 台半ばに値を下げた。5月は、インドの輸出停止やウクライナ産の輸出停滞から、12ドル/bu 台後半に値を上げたものの、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画等から10ドル/bu 台後半に値を下げた。6月は、米国や欧州での冬小麦の収穫進展、6月末のUSDA 面積調査での予想を上回る作付面積から、8ドル/bu 台半ばに値を下げた。

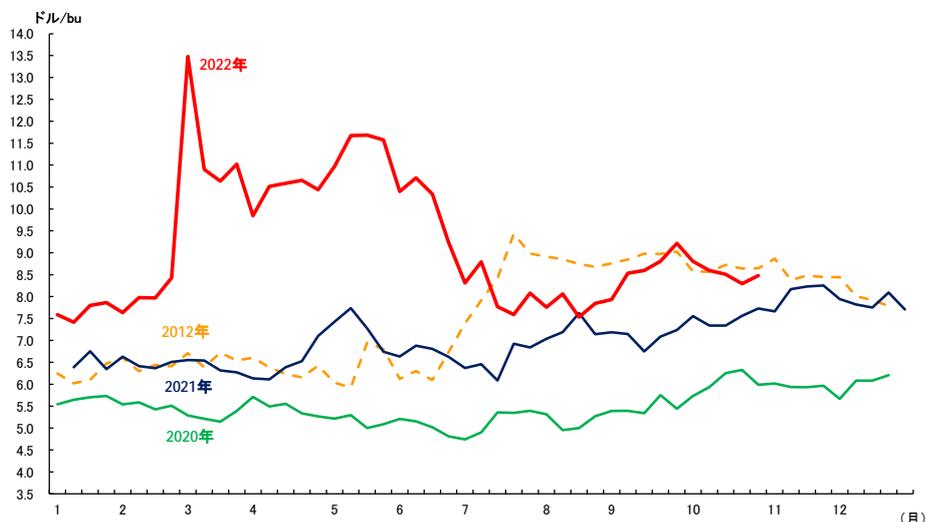
【7月以降】

7月に入り、EUでの乾燥による生産減見込み等から8ドル/bu 台後半に値を上げたものの、各国の冬小麦の収穫の進展や、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連でのウクライナ産穀物輸出再開に向けた合意への期待感等から7ドル/bu 台半ばに値を下げた。その後、ウクライナからの輸出再開の不透明感から8ドル/bu 前後に値を上げた。

8月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開から7ドル/bu 台半ばに値を下げたものの、米国プレーンズの高湿・乾燥懸念やドル安の進行等から、8ドル/トン台前半に値を上げた。8月中旬には、ウクライナ産穀物の輸出進展から7ドル/bu 台前半まで値を下げたものの、その後、とうもろこし、大豆価格の上昇に追随し、8ドル/bu 前後に値を上げた。

9月に入り、ウクライナ産の黒海経由輸出に関し、ロシア側からの合意条件見直し示唆や、ロシア占領地の住民投票問題等によるウクライナからの輸出の再懸念、米国の9月の四半期在庫量が市場予測を下回ったことから9ドル/bu 台前半に値を上げた。

10月に入り、ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から9ドル/bu 台前半に値を上げたものの、豊作によるロシアの輸出枠撤廃の可能性やウクライナ産の黒海経由での輸出維持に向けた協議の見通し等から8ドル/bu 台前半に値を下げた。10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止することにより一方的に表明したことにより値を上げ、10月末現在、8ドル/bu 台後半で推移。



注:シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格(セツルメント)である。
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移。

● とうもろこし：6.81ドル/bu（前年同時期の価格：5.54ドル/bu）

【価格は、シカゴ商品取引所における2022年11月第1週末のセツルメント価格。史上最高値：8.31ドル/bu(2012年8月21日)】

【1月～3月】

1月は、南米の乾燥懸念に支えられ6ドル/bu台前半で推移。2月は、ロシアのウクライナ侵攻やラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念、原油価格の上昇等から7ドル/bu台半ばに値を上げた。3月もウクライナ情勢等から、7ドル/bu台半ばで推移。

【4月～6月】

4月は、市場予想を下回るUSDA作付意向面積、ロシアによるウクライナ侵攻の深刻化、米国中西部の低温や雨がちな天候による作付け遅れ、原油価格の高止まり等から4月半ばに8ドル/bu台前半に値を上げた。5月は、天候改善による米国中西部の遅れていた作付けの加速や、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画等から7ドル/bu台半ばに緩やかに値を下げた。6月は、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まり、堅調なエタノール生産から7ドル/bu台後半に値を上げたものの、6月下旬以降、6月末のUSDA面積調査での予想を上回る作付面積等から、7ドル/bu台半ばに値を下げた。

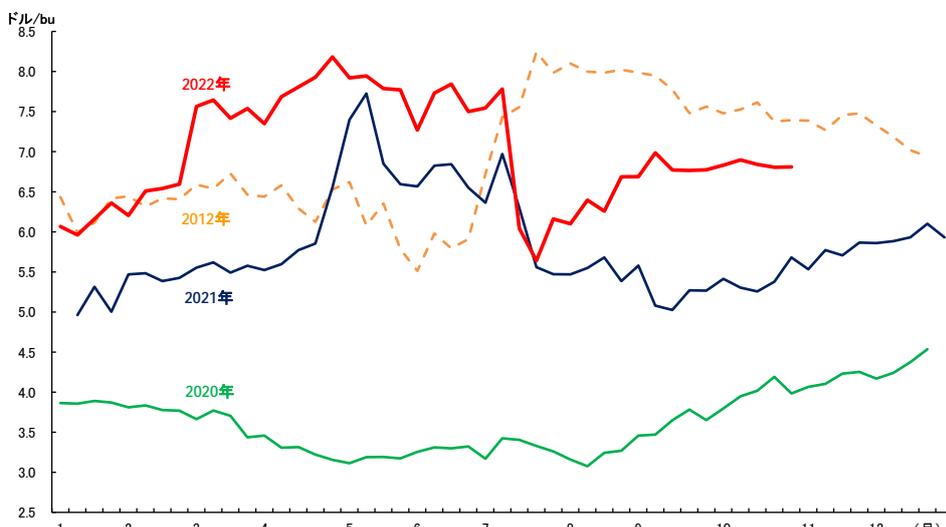
【7月以降】

7月に入り、米国中西部の高温・乾燥に伴う作柄悪化懸念等から7ドル/bu台後半に値を上げたものの、7月下旬にかけ、米国中西部の一部での降雨予報やウクライナ産穀物輸出再開に向けた4者合意への期待感等から5ドル/bu台半ばに大幅に値を下げた。その後、米国中西部の高温・乾燥懸念から6ドル/bu台前半に値を上げた。

8月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開等から6ドル/bu前後に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、6ドル/bu台前半に値を上げた。8月中旬以降、米国中西部の降雨予報やウクライナ産輸出の増加も、EU及び米国での高温・乾燥による作柄悪化懸念から6ドル/bu台後半に値を上げた。

9月に入り、EUの高温・乾燥による作柄悪化懸念やUSDAの9月需給報告での市場予想を上回る米国生産量の下方修正等から、9月中旬に7ドル/bu台前半に値を上げたものの、世界的な景気後退懸念や米国で収穫の進展等から値を下げたが、9月の米国の四半期在庫量が市場予測を下回ったことから6ドル/bu台後半に値を上げた。

10月に入り、10月中旬にウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から、一時7ドル/bu近くまで値を上げた。米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等からほぼ横ばいで推移。10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより値を上げ、10月末現在、7ドル/bu近くで推移。



注：シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格（セツルメント）である。
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移

● コメ：440 ドル/トン（前年同時期の価格：411 ドル/トン）

【価格は、タイ国家貿易取引委員会における 2022 年 11 月第 1 水曜日の FOB 価格。史上最高値：1,038 ドル/トン(2008 年 5 月 21 日)】

【1月～3月】

1月は、アフリカを始めとした国際市場におけるタイ米への強い需要等から 450 ドル/トン台前半に値を上げた。2月は、旧正月の休暇期間などによる需要の減少等から、440 ドル/トン台半ばに値を下げ、その後もバーツ高により海外からの需要が減少したことで更に 430 ドル/トン台半ばに値を下げた。3月は、ロシアのウクライナ侵攻が深刻化する中でも、ほぼ横ばいで推移したものの、3月下旬からアフリカ諸国や中東からの需要により 440 ドル/トン台前半に値を上げた。

【4月～6月】

4月は、ラマダンを迎えたアフリカ諸国の需要に下支えされ、440 ドル/トン台前半から半ばで推移。その後、イラクからの需要で 450 ドル/トン前後に値を上げた。5月は、継続するイラク等からの強い需要により 480 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、インド産等との価格競争により値を下げたものの、中東諸国からの需要により再び 480 ドル/トン台前半に値を上げた。6月は、2017 年以來のバーツ安に加え、イラクやアフリカ諸国からの需要が低下したことから、6月下旬に 440 ドル/トン前後に値を下げた。

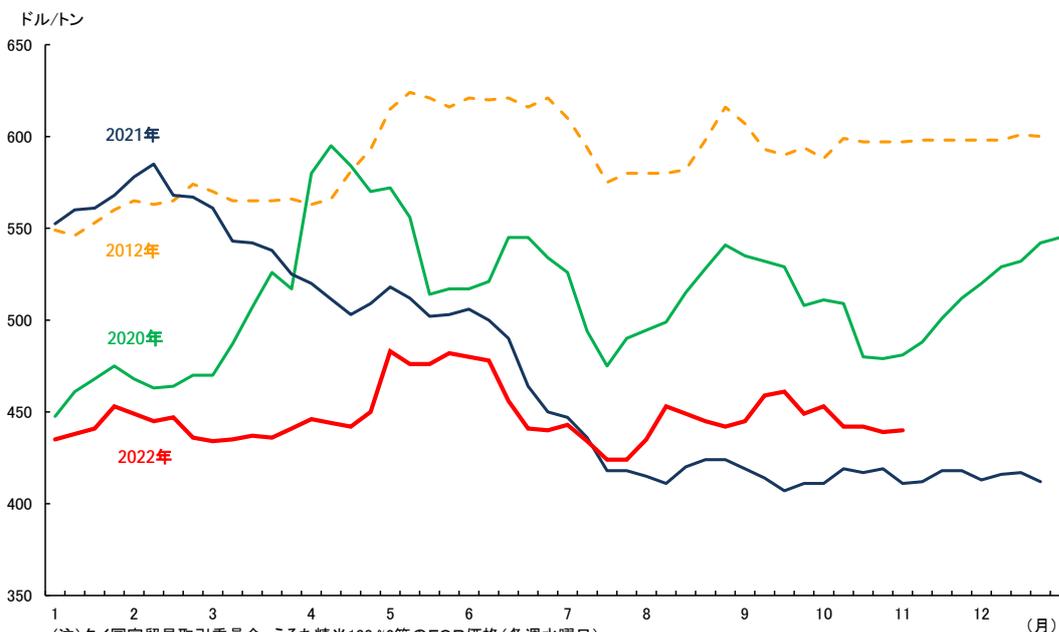
【7月以降】

7月に入り、一時バーツ高となったものの、再びバーツ安に転じたことや、乾季作の新穀が市場に流通し国内価格が低下したこと、ベトナム産に対して価格競争力があるものの、新規需要が軟調なことから 420 ドル/トン台半ばに値を下げた。

8月に入り、タイ国内の堅調な需要に加え、中東等からの新規需要等から、一時 450 ドル/トン台前半に値を上げたものの、軟調な需要により 440 ドル/トン台前半に値を下げた。

9月に入り、パキスタンの洪水による被害や、インドの輸出規制（碎米輸出禁止と一部精米の 20%輸出税賦課）から 460 ドル/トン台前半に値を上げたものの、タイのバーツ安や軟調な国際需要により 450 ドル/トン前後に値を下げた。

10月に入り、バーツ高により、一時 450 ドル/トン台前半まで値を上げたものの、その後のバーツ安や新穀の供給開始から値を下げ、10月下旬現在、440 ドル/トン前後で推移。



(注)タイ国家貿易取引委員会、うるち精米100%2等のFOB価格(各週水曜日)
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格推移。

● 大豆：14.52 ドル/bu（前年同時期の価格：11.92 ドル/bu）

【価格は、シカゴ商品取引所における2022年11月第1週末のセツルメント価格。史上最高値：17.71 ドル/bu(2012年9月4日)】

【1月～3月】

1月は、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念等から1月上旬に14ドル/bu前後に値を上げた。2月は、乾燥による南米の生産量の減少見通し等から2月上旬に16ドル/bu台後半に値を上げたものの、下旬には南米産地の降雨予報や利益確定の動きから一時15ドル/bu台後半に値を下げた。3月は、ウクライナ情勢の緊張の中、南米の高温・乾燥によるさらなる減産懸念や、植物油価格全体の上昇等から、17ドル/bu台前半に値を上げた。

【4月～6月】

4月は、市場予想を上回るUSDA作付意向面積等から15ドル/bu台後半に値を下げたものの、4月上旬以降、ブラジルの高温・乾燥による減産やロシアのウクライナ侵攻の深刻化、植物油価格上昇等から上昇した。4月下旬に17ドル/bu台半ばに値を上げたものの、コロナ感染に伴うロックダウンによる中国の需要低迷懸念等から、4月末に17ドル/bu前後に値を下げた。5月は、5月中旬にかけ、米国の中国向けを中心とした好調な大豆輸出、ロシアのウクライナ侵攻の継続や、植物油価格の高止まり等から17ドル/bu台前半に再び値を上げ、さらに6月上旬に、中国のロックダウンの解除、大豆の堅調な国内需要や原油相場の上昇等から17.69ドル/buと2012年9月の史上最高値に迫る水準に値を上げた。その後、中国需要の伸び悩み懸念や欧米の経済減速懸念から値を下げたものの、予想を下回る米国産の作柄評価やUSDA面積調査等から6月末に16ドル/bu台後半に値を上げた。

【7月以降】

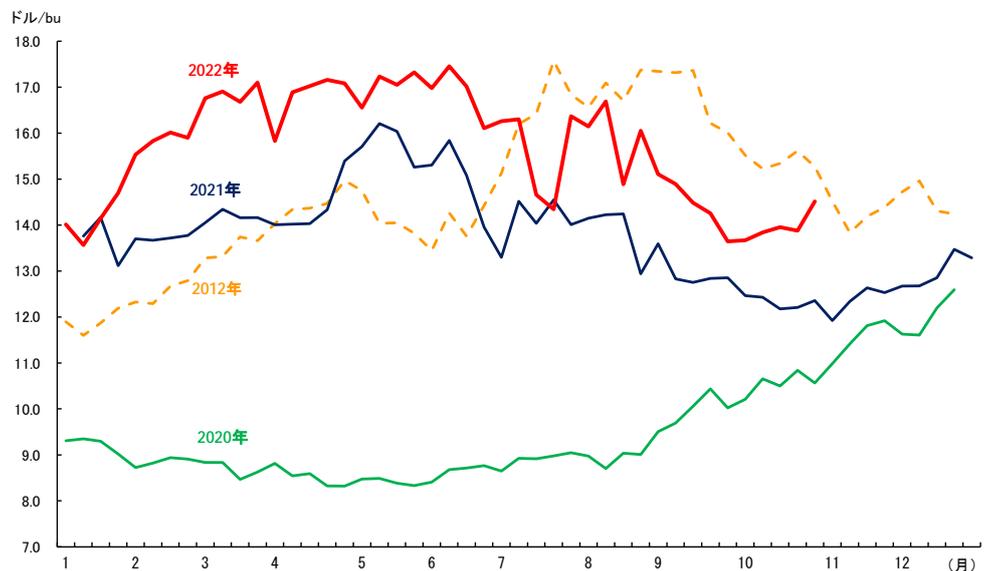
7月に入り、欧米を中心とした世界的な景気後退懸念から、7月上旬に15ドル/bu台後半まで値を下げたものの、株式や原油価格の上昇から、16ドル/bu台半ばに値を上げた。7月中旬から下旬にかけて、米国中西部の一部での降雨予報から14ドル/bu台前半に大幅に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念から16ドル/bu台前半に値を上げた。

8月に入り、米国産大豆の作柄改善等から15ドル/bu台半ばに値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、17ドル/bu前後に値を上げた。8月中旬以降、米国中西部の降雨予報等から14ドル/bu台半ばに値を下げたものの、米国の高温・乾燥による作柄悪化懸念から16ドル/bu前後に値を上げた。その後、米国では着莢期に適した天候予報から15ドル/bu前後に値を下げた。

9月に入り、中国の景気減速等から14ドル/bu台半ばまで値を下げたものの、USDAの9月需給報告での市場予想を上回る米国生産量の下方修正等から9月中旬に14ドル/bu台後半に値を上げた。その後、世界的な景気後退懸念や米国での収穫の進展、米国の四半期在庫量が市場予測を上回ったこと等から13ドル/bu台後半に値を下げた。

10月に入り、10月中旬にUSDAの10月需給報告で米国の生産量が市場予想に反して下方修正されたこと等から、一時14ドル/bu近くまで値を上げた。米国の

期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から値が小幅に上下し、10月末現在、14ドル/bu前後で推移。



注：シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格(セツルメント)である。グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移。

(参考2)

1 為替レート(対ドル円相場)

単位:円/ドル

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
103.39	93.61	87.75	79.76	79.79	97.71	105.79	121.09	108.77	112.13	110.41
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
108.99	106.78	103.70	105.36	108.65	109.13	109.19	110.11	110.29	109.84	110.17
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
113.10	114.13	113.87	114.83	115.20	118.51	126.04	128.78	133.86	136.63	135.24
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
143.14	147.01									

出典：為替相場(東京インターバンク相場) 東京市場、中心相場 スポット・レート
日本銀行: 主要時系列統計データ表 <http://www.stat-search.boj.or.jp/>
年別は、日次データの平均値。月別は、月次データの月中平均。

2 海上運賃(フレート)

単位:ドル/トン

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
93.65	50.71	63.59	54.88	49.18	46.63	44.35	30.30	27.92	38.48	46.42
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
45.01	52.10	46.28	52.33	55.71	56.55	61.85	69.35	81.39	77.18	77.99
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
80.26	66.15	64.43	60.23	58.96	69.99	71.65	73.90	70.12	61.28	55.02
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
51.90	56.61									

出典：米国(ガルフ)ー日本間、Heavy Grains, 50,000トン以上
国際穀物理事会(International Grains Council); Ocean Freight Rates, 「World Grain Statistics」, 「IGC Grain Market Indicators」
年別は月別データの平均値。月別は、毎日価格の平均値。

3 原油価格(WTI: 米国ウエスト・テキサス・インターミディエート)

単位:ドル/バレル

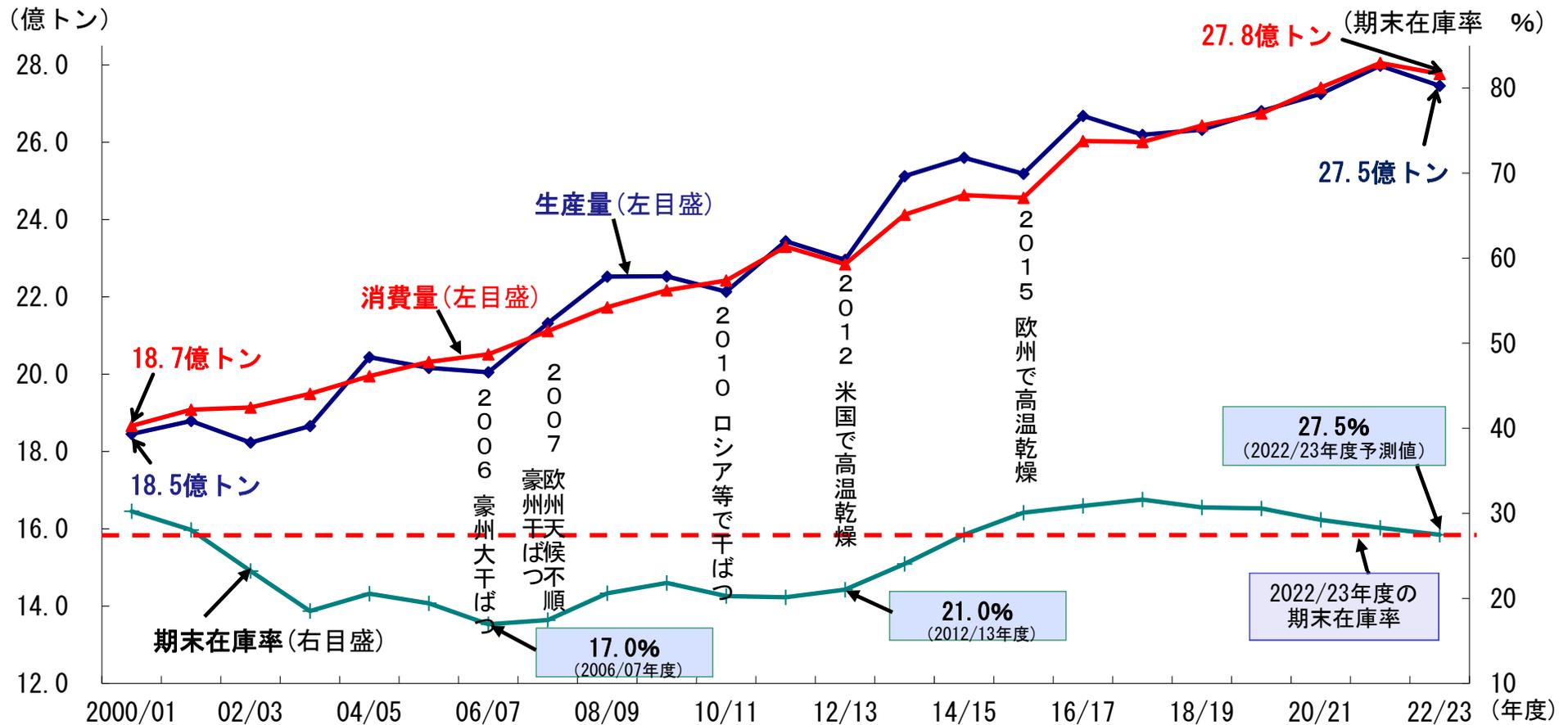
2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
99.65	61.80	79.53	95.12	94.21	97.97	93.00	48.80	43.32	50.95	64.77
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
57.03	39.40	52.10	59.06	62.36	61.69	65.16	71.35	72.43	67.71	71.54
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
81.22	78.65	71.69	82.98	91.63	108.26	101.64	109.26	114.34	99.38	91.48
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
83.80	87.55									

出典：内閣府経済財政分析統括官付海外担当「海外経済データ -月次アップデート-」令和4年10月, 124頁
但し、2022年10月 は、米国エネルギー情報局(U.S. Energy Information Administration)「Weekly Petroleum Status Report」の日次データの平均値。

穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2022)、「PS&D」
 (注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。